
自分が変わるきっかけ

Conference

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分が変わるきっかけ

【Nコード】

N2524E

【作者名】

Conference

【あらすじ】

これは、好きな人にこっぴどく振られた雄二が精一杯生きていくラブコメです。

プロローグ（前書き）

初めてですから自信ないけど広い心で読んでください

プロローグ

高校2年の夏、始業式から数日たったある日に俺は産まれて初めて告白した。

そして、産まれて初めての告白で自分の存在を否定されてしまった。天国にいるであろう母さん今日俺は生きていく自信を失いました。

女は世界の宝

ジリリリリリ

俺は、いつもと同じ目覚ましの鳴る音で目を覚ました。

だけど、俺の心はいつもと違う想いで満ち溢れているぜ。

どんな想いかというとめっちゃくちゃ緊張しているわけですよ。

俺、春日雄二の現状はを簡単に説明すると数日前の入学式に遡るわけである。

いつもより早く起きた俺は、準備を早々に終えて学校に行ったわけである。

暫く行ったところで馬鹿を発見したわけである。

「よう、健汰早いな。」

「何だ雄二かよ。こついうときは女の子がおはようとか言って駆け寄って来るのが常識だろうが期待で膨らんだこの気持ちを返せ」
「やっぱり、こいつは馬鹿だそれ以外で現す言葉が見つからない。」

この山崎健汰は容姿はいいのだが女好きで馬鹿なもんだから全くと言っていいほどモテナイ男である。

「どこの常識だよそれは。にしてもいつもよりずいぶん早いな」

「ふつ当然だ、今日は入学式だぜ。男たるもの新入生のチエツクは当然である。しかも今日はクラス発表もあるからなぐずぐずしてはいられん」

「相変わらずお前の頭には女の事しかないのかよ」

「女は世界の宝だぞ、宝を追い求めるのは男のサガだろうが。」

「よし、お前に馬鹿Aというあだ名をくれてやるっ」

「男からそんなあだ名をつけられても嬉しくないわ。でも、何だか

んだ言って雄二も鳳仙香織と同じクラスになれるのを期待してるんだろ？」

鳳仙香織とは俺と同じ学年で綺麗な黒髪のロング。

気の強そうな凛々しい顔。スタイルはバツグンで健汰がいうには推定Eカップだそうだ。とんでもないお金持ちのお嬢様ときている完璧超人であり俺の好きな人でもある。

「確かになあ、一緒のクラスになれるといいよな」

「いい加減告白しないと誰かにとられるぞ」

「分かってるよ」

それから10分位歩くと雄二が通っている柏原学院が見えて来た。

柏原学院は小中高大の一貫になっているマンモス校である。

第2話、神様有り難う（前書き）

他の作品を参考にすると時間がかかり面倒なのでやりたいようにやることにしました。文才がないんで読みづらくても勘弁してください。

第2話、神様有り難う

学校の掲示板の前は朝早いというのに随分込んでいた。

「うわぁ、随分込んでるな」

「よし雄二、俺の為に馬になれ」

「そっか、そのてがあつたな」

健汰は本当にいいことを言うと思う。

ただし、馬になるのはお前だけだな。

「健汰、お前が馬になつた方がいいと思うぞ!!」

「なつどういふことだ!？」

「少しは考えろよ、お前が馬になるイコール体制を低くして堂々と女子のスカートの中を覗けると言うわけだ」

「なつ、なんて素晴らしい考えだ俺は喜んで馬になるぜ」

そう言つて屈んだ健汰の背中を俺は思いっきり力強く踏みつけてやった。

「ぐっ、敗れるかゝ俺の女の子に対する情熱を嘗めるなよ!!」

(ちっ、耐えきりやがった。女子のスカートの中を覗く為の情熱とは随分不純な動機的情熱もあつたものだな)

健汰の馬鹿をほどほどに痛め付けてから、俺は期待半分、諦め半分でクラス発表を見ることにした。

その時、俺は神様に感謝することになつたんだよね。

何と憧れの鳳仙さんと一緒にクラスだったのだから。

俺は健汰の上で跳びはねながら健汰に報告した。

「俺は5組だったぜ。ついでにお前も」

「ぐふっ、分かったから俺の上で跳びはねるな!!」

「えっ何だって!？」

「もうだめだ。死ぬ」

そう言っただけ崩れ落ちた健汰。

「スカートの中を覗き見してるから悪いんだぜ。」

そう言っただけ俺は人間の儂さを自覚して少し大人になり教室に向かった。

その場に残ったのは、健汰の屍と、それを遠くから見ている野次馬だけであった。クラスに着いた俺は鳳仙さんがまだ来ていないのを確認して、多少テンションが下がったところで、適当な席に座った。

俺が暫くぼくとしてしていると健汰が入って来た。

「生きてたんだ。よかったな!!」

「雄二のせいで生死の境をさ迷ってしまったわ!!」

そう言っただけ俺の前に座り女の子の子のチェックをしながら話しかけてくる。その行動のさりげなさ、会社の上司が落ち込んでいる部下に励ましながらさりげなく体に触っていくみたいに感じられてちょっとひいてしまった。

「鳳仙さんとは同じクラスなのか？」

「うん、そうなんだよ。」

「お近づきになれるチャンスじゃん。そして、そのまま告白するんだ!!お前ならできる!!」

「そうかなあ。」

「お前は眼鏡かけているから分かりづらいけど眼鏡取ったらかっこいいんだから眼鏡をとって告白するんだ!!」

健汰、女の子のチェックしながら真剣に話してもただの馬鹿にしか
見えないぞ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524e/>

自分が変わるきっかけ

2010年11月6日17時54分発行